

を起こさずするで有ります、世にはかゝる家庭かめ
 づらしやないのですが、ある婦人は申されました
 一家は主婦の心一つでいかようともなるものと
 實際をうでしよう、してその奥様はとにかく、老人
 方はどんなに味氣ない世と罪のない世までをかこ
 つのでしよう。……それと反して、平和圓滿なる
 家庭はたえず春風が吹いて、他人までが暖かに感
 じられます其樂しさはとて私の拙筆には及びま
 せぬが、皆様にはとくに御承知の事で、そして讀
 者諸姉にはさぞ御實行の事と、私よろこびま
 す。

私その日のくるゝまで光子さんと遊びました
 また〜歸りたくはない程で有りました、實によ
 いお子はよい家庭でなくては出来ません、そして
 よい家庭は主婦の心一つで有ります、で婦人た

二十六
 る以上は婦人たる務を一時も忽諸になさらず、た
 い一時の感情によりて八ッあたりなどなること
 は、以ての外で實に可笑しい行爲では有りま
 せぬか、吾子のよきを望みましたら、婦人の婦人
 たる道母の母たる務を何より大切に致さなければ
 成りません事と存じまして。こそ。

富士ちやんの日記

(明治三十四年十一月生)

會員 某女

明治三十五年七月二十六日。今日は丁度生後九ヶ
 月なり。「エンコ」オカヤリなどは早くから出来
 れど、未だ這へず、少しく遅き方ならんか。

二十八日。いつもの通りエンコをして、鼻をスー
 ン鳴らしながら遊ぶ。日暮頃母に抱かれ、唐紙

に映る自分の影を、バー／＼と言ひ、捕へんとし
て思ふ様にならず、終に泣き出したり

二十九日。本日始めて二三歩這へり、一週間程前
から這ふ様の風はなし居たれど、本當に這ひしは
今日が始めてなり。夕方「エンコ」したまゝゝぬむ
りをなす、其様子いかにも可笑し。

三十日。夕方湯屋に連れ行きたるに、ねむりなが
らはある、晝間少しづゝ這ふために非常につかれ
るものと見ゆ。

八月三日。日曜だから父も朝から家に居られると
ニコ／＼して色々の藝をして見せる。富士ちゃん
の藝は、母ちやんの乳をさがし出すことが上手な
のと、團扇とか、自分の着物の袖などを以て、顔
をかくし之をのけると一所にバー／＼と言ふこと
舌をクン／＼鳴すこと、少し機嫌の悪い時は怒る

つもりか、ムー／＼と、太き聲にて唸ることなど
澤山あります。

八月四日。笑ふことも追々上手になつて、人の顔
を見ると、すぐニコ／＼と笑ふて、愛嬌をふりま
く、叔父さんが余程好きらしい、子供は亂暴の事
をするを好むと見え、叔父が抱くと、頭の上へ差
上げたり、又体操をして見せたりなどするから、
大變に喜んでとかく叔父さんに抱れたがる。

八月五日。漸く疊一枚位い這ふ様になれり。誰か
が、富士ちゃん「ドッコイ」など言ふとキツト兩
手を動しニコ／＼しながら躍る様な風をなす。

夕方食事がすむと、又色々の藝をして遊ぶ、實に
子供は天真爛漫なるものと皆々打つどひ是れで一
日の疲れも忘れると共に一時間程かもしろく遊ぶ
八月六日。錦町の工藤にて、寫眞を撮る、アマリ

能く肥え居たればハダカで寫す。寫真がすみ、一寸母が、油斷なし居るまに、「ウンコ」を澤山して其汚れた處を切に手でかきまはして居たには、閉口した。

一週間の献立

某 夕 女

日	畫	鯛鹽燒	鶏肉スープ
月	にまめ	ほうとうにつけ	〔じやがいのあなをんじんにうにんじん
火	せんまい、あげ、(にしめ)	ピフステーキ	
水	くわいに、んとん、(にしめ)	ねぎま	
木	はせこぶま	とろ汁	
金	はす	さしみ	
土	ざと、いも	牡蠣フライ	

朝は味噌汁と香の物だけなり



小笠原父島の二見港

や て

東京を南に距る海路五百三十哩ばかりの海中に一島がある、即ち小笠原群島の父島なり。此の群島は北緯廿六度卅二分に始まつて廿七度四十三分に終り、東經百四十二度五分から同十六度にわたり、大小九十有七の島嶼相連つて、南北に擴つて居るが、其の面積は全体を合算して、僅かに五方里餘に過ぎないのである。其の住民は千〇十六、四、千六百九十三人である。